
夢想劇

聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想劇

【ΖΖΠ—Δ】

Ζ8552M

【作者名】

聖

【あらすじ】

王國に降り立った謎の者たち、

その者たちによって世界は終わりを告げる。

物語は、終わった世界を旅する2人の男のそれぞれの目線で始まる。

あるところに、2人の天才がいた。

1人の天才は、
幼い頃から自分の力を過信することなく、王国の騎士としてその名
を広めた。

人々から「英雄」と呼ばれ絶大な信頼を得た。

もう1人の天才は、
その才能を人々から、ましてや自分自身も知ることはなかつた。

名家に生まれたその天才は優秀な姉と比べられ、親からは度々暴力
を受ける日々をおくる。

その天才は、親からの罵声や暴力に対し、憎しみや悲しみを表す
ことなく、ただただ無表情だった。

国の人々はその様子を気味悪がり、
「悪魔」と呼んだ。

それから数年後のある日、「悪魔」と呼ばれた天才は自分の両親を殺した。

四肢を一つずつ斬り、苦しみ悶える2人に満足してから、その頭を潰した。

王国の騎士が到着したときその家の中は酷い惨状だった。

部屋中に飛び散った血、

隅で泣きながら震える姉、

そして、今までどんなときでも表情を変えることがなかつた「悪魔」が、楽しそうに笑いながら両親の頭の残骸を踏みつぶしていた。

「悪魔」は捕らえられ、王国の牢獄で死刑を待つ身となつた。

第1話【全てが終わる日始める日?】

SHADE「W」

とある教会、

孤児院を併設しているこの場所で、太陽が照りつける中、子供たちが元気に遊んでいる。

そのなかに1人の少女、

子供たちの保護者的立場なのか、孤児院の広場全体を見渡せる位置に椅子を置いて本を読んでいる。

緑色の長い髪、整った顔つき、スラッシュの高いスタイルのいい身体、

「美少女」と言つても過言ではない容姿である。

しかし、表情は寂しげであった。

「クレアお姉ちゃん、どうしたの？」

1人の女の子がその少女に話しかける。

「えつ？」

完全に不意をつかれ、少女は少し驚く。

「クレアお姉ちゃん、いつも元気なのに今日はどうしたの？
神父様もいつもは遊んでくれるのに、今日はお祈りしてばかりだし。

女の子が泣きそうな声で聞いてきたので、少女は女の子の頭を撫でながらそれに答える。

「今日は、一つの魂が神様のもとへ向かうの。
だから神父はお祈りしてるんだよ。」

「ふーん、そうなんだ。」

よく解らなかつたのか、女の子はまた遊びの輪のなかへ戻つていつ

た。

雲ひとつなかつた青空が、淀み始める。

城下町

市場が並んでこじらでは常に多くの人がぎわってこる。

今日はあるイベントが行われるため、いつもより多くの人がいる。

「あら、ルクルーシャちゃん。久しぶりねえ。」

市場での買い物帰りの主婦たちが、店番してる少女に声をかける。

ルクルーシャと呼ばれた少女はとても小柄な身体で、子供と言われてもおかしくない姿だった。

しかし短い白髪と氷のような表情がそれを否定する。

「ひざにひば」

ルクルーシャは静かな声で、表情を全く変えず機械のよひに会釈をする。

「御両親が亡くなつてから毎日仕事頑張つてるわね。
困つたことがあつたらこいつでも言つてね。」

主婦たちはそつそつと彼女の前から去つていった。

ルクルーシャの耳に、主婦らの小さな話し合いがはいつてくる。

「ルクルーシャちゃん、昔はかわいい子だったのに・・・。」

「やつぱり、両親をあの悪魔に殺されたから…………。」

「でももう大丈夫よ。あの悪魔は今日で死ぬんですから…………。」

空に淀み始めた雲は、照りつけていた太陽を覆いつぶへます。

第2話【全てが終わる日始まる日?】

SHADE「P」

王国地下牢獄

じめじめした階段を、一歩ずつ降りていく。

王国に何年も騎士として仕えているが、この地下牢獄の空気はいつまで経つても慣れることがない。

俺の後ろにいる2人の騎士も、同じ気持ちだろ。

階段をゆっくり降りた先にあの男の入っている牢屋がある。

2人の騎士の1人が、恐る恐る牢屋の鍵を開ける。

牢屋のなかには、ボサボサに伸び散らかした白髪の男がいる。

全身を鎖で巻き、田隠しをして、口には縄をくわえさせていた。

こんな厳重な拘束、連續殺人犯でもする」とはない。

だがこの男がこの牢獄で起した「事件」を思えば、これくらいしなければならない。

まあ今はこいつらの不始末を挙げているときではない。

俺はもう1人の騎士に白髪の男の田隠しと縄を取らせた。

俺は眩しそうに田を開けたその男に話しかける。

「どうだベスピウス、気分のほうは?」

白髪の男、ベスピウスは口を2、3回動かしたあと、

「まあまあだな。」

とだけ言った。

俺はその場にしゃがみこんで、ベスピウスと目を合わせる。

後ろの騎士たちが、近づくと危ないとか言つてきたが気にしない。

「今日がお前の死刑執行の日だ。

正直、かつての友の死刑を行わなければならぬなんて、しのびないがな。」

「ハツ、かつての友だあ？ガキの頃に数回遊んだ程度だろ？」

ベスピウスは俺の言葉を鼻で笑う。

昔と違つて、コイツは表情豊かになつたと思つ。

まあ、悪い意味でだが。

「やう言つたな。クレアはお前と一緒に遊べて嬉しいと言つていたんだが。」

「今この時に何言つたって俺は今日で死ぬんだ。
そつと死刑場へ連れて行けよ。」

ベスピウスはそつと俺にこもやりたくない仕事が残つてゐる。

俺はその言葉を口にする。

「最後に言つておくれとはないか？」

死刑の直前死刑囚には最後の言葉を言つ之權利がある。

たいていは死ぬのが怖いやらいの命乞いだ。やりたくもない仕事と言つたが、本当にこの仕事は嫌いだ。

だが目の前の男は違つた。

「そうだな、
強いて言つながら、看守はもつと強い奴を雇つたほうがいいと思つぞ。
また誰かに殺されちまうからな。」

ベスピウスはククッと笑いながら言つた。

この男、例の事件を掘り起しつづけてるとは……。

強気な態度なのか、本気でそう思つてゐるのか相変わらずわからぬ
い奴だ。

「・・・わかった、検討しておひづ。」

俺はそう言つて、後ろの2人にベスピウスに再び目隠しと縄をさせ

る。

死刑が執行されるまで、これらが外されることはもつない。

つまり、事実上さつきのが本当に最後の奴との会話である。

先頭に2人の騎士、後ろは俺、間にベスピウスを挟み俺たちは死刑場へと向かった。

死刑場

王国の城のバルコニーに作られた死刑場に着いたのはあれから10分後だった。

城下は大勢の人で賑わっている。

民衆にとつては、この死刑執行も一つの娯楽となる。

ましてやベスピウスは「悪魔」と呼ばれた男だ、見物客の数は半端ない。

ベスピウスが所定の位置につき、司祭が罪状を読み上げている。

その途中、俺の頬に冷たい感触がした。空を見上げると、さっきまで良かつた天気がうつてかわって、どす黒い雲があたりを覆っている。

早めに終わらさないと後々面倒なことになりそうだ。

そう思つて再び死刑場を見たとき、

目の前にある3人がいた。

それはこれから死ぬベスピウスではない、

罪状を読み上げている司祭ではない、

研いだ剣を持つている執行人ではない、

ここにいるはずもない輩だった。

3人の印象は、とにかく黒だった。

右は黒いタキシードを着て片手に薔薇を持った男。

左は全身黒の甲冑をつけた者。（性別はわからない）

そして中央、頭まで覆つた黒のコートを羽織る男。いつ現れた？

どうやってこの場所に？

なんのために？

、
数々の疑問が浮かんだが、とにかく俺が一番最初にやつたことは・・

「何者だ、貴様ら！」

剣を抜き、相手に向け、怒声をはなつ。

こんなマニアカル通りのことしか出来なかつた。

3人のうちの中央の男が振り向く。

「ほう、得体の知れない連中にこうも早く威嚇をすることは、見込みありだな。

・・・・しかし、」

男は腕を上げ、俺に手のひらを見せる。

「相手の強さを見極めてから、するべきだったな。」

男の手が黒く光ったと思った瞬間、

ゾンビ…

とこう音が響いた

「・・・・・つあーー」

俺は悲鳴にもならない叫び声をあげ、その痛みと同時に…、

自分の腹に手のひら大の穴が開いていることに気づいた。

激痛に耐えられず、その場に倒れ込み、意識が遠のいていく。

薄れゆく意識のなか、俺は一つだけ確信した

この日、この世界は終わったのだと・・・。

第1話【全てが終わる日始める日】

SHADE「B」

強いやつと戦いたい、

俺の願いはそれだけだ。

俺の父は、若き頃は有名な騎士だったらしい。

父の父も、その上の父も。

我が家は代々優秀な騎士を輩出する名家のようだ。

だから俺も、幼い頃から姉と共に騎士としての厳しい鍛錬を行つてきた。

だが、俺は剣の才が全くと言つていいほどなかつた。

姉がスイスイと父に言わせたことを成し遂げていくのを、ただ見て

いるしかなかつた。

母に蔑まれ、父に殴られ、民衆には「悪魔」と疎まれる。

当時まだガキで力のなかつた自分に出来たのは、耐えることだけだつた。

少なくとも、父が強いことは知つていた。

今はまだそのときではない

俺は、そう自分に言い聞かせて生きてきた。

そして16歳になつた日、

俺はついに決行した。

手頃な武器がなかつたので家にあつた斧を使うことにした。

そして、その斧を持って両親の部屋に入つていく。

結果は、予想以上に呆氣なかつた。

これが騎士の名家の強さなのかと疑うくらい2人とも脆かつた。

謠ざきを聞きつけた王国の騎士が剣を抜いて斬りかかつてくる。

遅すぎるその攻撃を軽くよけて、斧で首をはねる。

やはり弱い。

弱い奴には興味がない。俺が脱力感にひたつているつむじ、他の騎士たちが俺を押さえ込んだ。

牢獄に入れられたあと、看守の強さをはからうと思つた。

こつちは両手足を縛られている身だ、いいハンデになるだろつ。

そつ思ったが、またこれも呆氣なかつた。

首を少し噛んだだけで、相手は血を噴き出し、その場で絶命した。

俺はその後目隠しと口に縄を入れられ、更に地下の牢屋に入れられた。

もつ強い奴はいないのか。

俺はこの世界に興味を失つていた。

つこせりきまでは・・・

死刑場へ連れて行かれ、目隠し状態で司祭の長い話を聞いていると、

突然前の人気が降り立つた音が聞こえ、

その次に銃声のような音、

次に悲鳴が聞こえた。

何が何だかわからずじつとしていると、

頭を何かに噛まれた痛みがはしる。

それにより目隠しが外れ、俺は辺りを見渡す。

一言で言えば、

地獄絵図だった。

空は真っ暗で城下には、禍々しい生き物が人々を襲っていた。

顔が腐った犬、動く屍、空を飛び回る首が3つの鳥、

そして本の中でしか見たことがないドラゴンの群れ。

地上では犬や屍、高いところへ逃げれば三首の鳥、そして逃げ切つてもドラゴンの口から出される業火で焼き死くされる。

辺りは火の海だった。

再び頭に激痛がはしる。

首を少し動かすと犬が俺の頭を噛んでいた。両手足が縛られているためもがくくらいしか手がない。

だが、なかなか犬は離れない。

そういうしているうちに、他の得体の知れない何かが束になつて俺に襲いかかってきた。

頭だけじゃなく、身体中の至る所に噛みついてくる。

だがそれにより、手足を縛っていた鎖が壊された。

俺はすぐさま立ち上がり、まず頭を噛みついていた犬を引っ剥がし、地面に叩きつける。

ブチツ、という鈍い音が鳴り、犬は動かなくなつた。

身体に噛みついている連中も同様に引っ剥がす。

その場にいた連中を全て動かない物にするのに5分もかからなかつた。

コイツらも弱い。城下町はすでにむすりくずりだつたが、ここも酷いものだ。

そこひじゅうに飛び散る肉片、血だまり。

連中が食い散らかしたあとが見事に残つてゐる。

その近くに俺をかつての友と言つた男、ファンタムが倒れていた。

腹に穴を開け、生きているかは解らなかつた。

俺はコイツの生死より、コイツを倒した者に興味が湧いた。

ファンタムは王国の騎士のトップに立つ男であり、俺もコイツには勝つことは難しいと思っていた。

それをこんなに安々倒す存在・・・。

俺は、城下町へと駆け出した。

正直、俺はまだ何が起こったか理解できない。だが見渡す限り、次々と現れる化け物達と戦いながら一つだけ確信した。

俺の世界は始まったのだと・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552m/>

夢想劇

2010年12月12日13時50分発行